

目 次

二十周年を迎えて……………	中野 幸一…………… i
古今集「花の歌群」(九〇〜一一八)の特質……………	人見 恭司…………… 1
——四季歌の表現との関わり——	
蜻蛉日記の「鶯」……………	斎藤 菜穂子…………… 14
——歌語からひらかれてゆく表現世界——	
蜻蛉日記中巻の独詠歌についての一考察……………	施 旻…………… 33
『紫式部日記』の表現……………	村井 幹子…………… 46
——「いまめかし」をめぐる(1)——	
成尋の門出繰り上げについて……………	岡崎 和夫…………… 64

——『成尋阿闍梨母日記』を読む——	
枕草子「くは」型章段の脱和歌的方法	鄭 順 粉……………81
——設題の問題を中心に——	

『竹取物語』と神仙思想——見捨てられた不死薬——	岡部 明日香……………100
うつほ物語 宰相の君母子の物語の意味	高野 英夫……………114
——楼の上上巻冒頭部を中心に——	
『源氏物語』絵合巻の表現方法	栗山 元子……………131
「朝顔」巻について	石井 一良……………150
玉鬘十帖の鬚黒について(2)	縄野 邦雄……………171
——結婚前の人物像を中心に——	
『源氏物語』晩年の光源氏	松木 典子……………191
——若菜下巻における諸事件をめぐっての光源氏の感懐を始点に——	
光源氏の最後の「光」——幻巻論——	陣野 英則……………208

早蕨・宿木・東屋巻より中の君の人生	青井 紀子……………223
ウエイリー書き入れ本『源氏物語』についての覚え書き	緑川 真知子……………241
『権中納言実材卿母集』の『源氏物語』巻名続歌について	尾上 美紀……………259
『いはでしのぶ物語』開巻部の表現機構	横 溝 博……………276
——一条院の桜・南殿の桜をめぐって——	
『しのびね』論	大倉 比呂志……………296

藤原公衡伝拾遺	兼築 信行……………308
伊勢物語第六十三段「百年に」の歌の解釈について	山田 利博……………315
『蜻蛉日記』から『更級日記』へ——初瀬詣で——	福家 俊幸……………320

若紫巻における源氏と藤壺の贈答歌 …………… 吉見 健夫 …… 326

——藤原実方歌との関わりについて——

『明月記』天福元年三月廿日条の散佚物語について

…………… 木戸 久二子 …… 331

「白鳥処女譚」から「しのび音型」へ …………… 助川 幸逸郎 …… 336

『中古文学論攷』二十年のあゆみ …………… 343

編集後記 …………… 349

### 古今集「花の歌群」(九〇～一一八)の特質

——四季歌の表現との関わり——

人見 恭 司

古今集「春」の部の歌の配列は、立春の日の歌から始まり、「春の果ての歌」と題された春の最後の日の歌で終わるといふ季節の時間的進行を基本としながら、その中で歌に詠まれている景物やテーマによって、いくつかの歌群に分かれ、そうした歌群によって全体が構成されている。歌群の構成や配列については、様々な説が出されているが、

『新日本古典文学大系』<sup>(1)</sup>の脚注に従うと「春」の部の構成は次のようになる。<sup>(2)</sup>

- 立春の日(一一二) 残雪(のこんのゆき)(三十九) 春の初め(一〇～一二) 鶯(二三～一六) 春の野(二七～二
- 三) 緑(二四～二五) 柳(二六～二七) 鳥(二八～二九) 帰る雁(三〇～三二) 梅(三三～四八) 桜(四九～八
- 九) 花(九〇～一一八) 藤(二一九～二二〇) 山吹(二二一～二二五) 逝く春(二二六～一三二) 春の終り(一
- 三三～一三四)

## 『紫式部日記』の表現

——「いまめかし」をめぐる(1)——

村井幹子

## はじめに

『紫式部日記』(以下、『日記』と略記する)は周知のように、一条天皇の中宮彰子所生の二皇子誕生を中心とする主家顕彰的性情を濃厚に持った日記である。したがって、その中には「をかし」(57例)をはじめとして、「はづかし」(16例)、「おもしろし」(12例)、「いまめかし」(11例)など、数多くの賛美表現が使われている。

私はこのうち、最も多く使われている「をかし」(57例)について、かつて、それが『日記』の中で単に多出していただけでなく、特定の対象に集中的であったり、賛美的な文脈のみならず否定的批判的文脈との関わりの中でも使用されるなど、『日記』の本質に関わるような使われ方がなされていることについて論考したことがあるが、使用順位第4位に位置する「いまめかし」(「いまめく」「ざれいまめく」を含む)についても、同様に検討する必要があると思っている。

なぜなら、「いまめかし」は一般にはa「当世風で立派だ。目新しくすぐれている。気が利いてしゃれている。」という賛美的側面(プラスイメージ)と、b「現代風で軽薄である。はなやかすぎて感心しない。きざっぽい。」という批判的側面(マイナスイメージ)とを併せもつ語であるが、このことは『日記』の性格とどう関わるのか考えてみる必要があると思うからである。しかも、『日記』の「いまめかし」11例は、数こそ少ないが、その対象は道長、中宮、頼通という主家筋はもとより、中宮大夫、中宮女房、五節の舞姫、果ては自分に至るまでとかなりの広がりを見せ、使用状況も『日記』の現存形態において、(1)「敦成親王誕生を中心とする記録的部分」に6例、(2)いわゆる「消息」体部分に2例、(3)年次不詳の「中宮御堂詣で」に1例、そして(4)「敦良親王誕生に関わる記録的部分」に2例と、『日記』のほぼ全域にわたり、いずれも賛美的記事との関わりの中で使用されているのである。

したがって、こうした『日記』の「いまめかし」の持つ対象上、使用上の広がりには、先に見たような「いまめかし」の語自体の持つプラス・マイナスの二面性とどのように関連するのか。そして何よりも、「いまめかし」の持つプラス・マイナスのイメージについての価値判断は、「いま」という時間を基準にして量られ、作者の「いま」という「時」に対する《時間意識》に強く左右されることに注意するならば、『日記』の「いまめかし」の持つプラス・マイナスのイメージは『日記』のどのような時間軸によってもたらされたものなのか、検討してみる必要があるのではないかと思う。

私は、作品の中における個々の表現は、作品世界を構築するための一つの方法として作者によって位置づけられ、同時に他の文脈との関わりにおいて作品的意味性を担わされていると見ているが、『日記』にみられる「いまめかし」はまさにそうした点において重要なキーワードと言い得るのではないかと思うのである。

そこで本稿は論の展開上、『日記』の現存形態(1)と(4)の「敦成・敦良両親王に関わる記録的部分」における「いまめかし」(8例)を取り上げ、それらが何を対象にどのような文脈の中で使われているかを検討し、それら